

ISA スクール マネジメント 通信

ワールドキャンパス ISAスクールマネジメント通信
 ○企画・編集／株式会社アイエスエイ 学校経営コンサルティング部
 ○発行人／倉橋 勝 ○発行所／株式会社アイエスエイ
 ○住所／〒105-0013 東京都港区浜松町2-7-1 第38荒井ビル2F
 ○本誌のお問い合わせは、TEL:050-5515-1813
 株式会社アイエスエイ 学校経営コンサルティング部

2010 AUG No.187

WORLD CAMPUS

日本の国際競争力に驕りが見えはじめたという危機感から、産業界ではグローバル人材の育成の必要性が叫ばれています。中学高校と大学は連携してこの要請に応えていかねばなりません。教育現場では、自分と社会とのかかわりをグローバルに捉え、最良の自己実現の場を世界から掴んでいこうとする逞しい志を持った10代をどのように育てていけばよいのでしょうか？弊社の2010年国際教育シンポジウムのご報告として、第一部では大学、第二部では中高二校の先進事例、第三部ではすぐに取り組める事例をご紹介します。

株式会社アイエスエイ
学校経営コンサルティング部

国際教育シンポジウム ～世界標準の進路を目指す。10代のグローバル・マインドをどう育てるか？～

第一部：基調講演 **世界で活躍する人づくりのための中学高校への期待**

公立大学法人 国際教養大学 学長 中嶋 嶺雄

中嶋 嶺雄

公立大学法人 国際教養大学 学長
【プロフィール】

文学士(東京外国語大学<中国科>, 1960年)

国際学修士(東京大学, 1965年)

社会学博士(東京大学, 1980年)



1977年 東京外国語大学教授

1995～2001年 東京外国語大学長

1998～2001年 国立大学協会副会長

1998～2006年 アジア太平洋大学交流機構(UMAP)国際事務総長

2000～2006年 財団法人大学セミナーハウス理事長

2001～2007年 文部科学省中央教育審議会委員

(大学院部会長・外国語専門部会主査)

2006～2008年 内閣教育再生会議有識者委員

2008年～現在 社団法人才能教育研究会会長

オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授を歴任

国際教養大学(AIU: Akita International University)は、秋田県から国際系の大学を作りたいというお話があり、これまでとまったく違う、これまでの日本の大学、特に国立大学にできなかったようなことがやれる大学として2004年にスタートしました。おかげさまで今いろんな意味で日本のトップクラスの大学のひとつに評価されるようにな

りましたが、設立からこれまで50億円弱しかかけておらず、バブル期にできた大学の1/10の費用でまかなっています。よい大学を作るのにはすごくお金がかかるかというのは神話であって、いわば学内の意思ひとつでできるのです。

●世界標準の教職員

全ての授業を英語でやるので、開学にあたりまず教員二十名を世界から募集したところ、五百数十名もが応募してきました。給与水準も日本の国立大学より少し高いくらいの水準でも集まりました。うちは、教授会はセメスターのはじめと終わりに1時間で済ませています。入学者の認定とか卒業認定などは教授会の事案ですが、教学に関する細かいことは全部教育研究会議でやります。教員の半分以上は外国人ですし、教授会も英語で行います。職員も公募をしたら優秀な人がたくさん集まり、現在いろいろなセクションでかなり高い専門性を持って働いています。特に女性は非常に優秀で、たとえばTOEIC900点台で留学経験があるというような方がたくさん応募してきました。そして教員職員すべて3年間の任期制で評価によって年俸が変

わかります。年俸制ですから、いろいろな段階で評定が恣意的にできないような細目に加えて学長評価や同僚評価を入れ、お互いに授業を見学する、そして職員はSD、教員はFDをやりましてお互いの授業を批評しあったり、どういう研究をお互いにやっているかを公開するような仕組みを作ったのです。そして評価のシステムは公開しています。

●多様な学生を集める入学試験

私どもの大学は前期後期の日程を離脱し、ABC日程という形で入学試験をやっています。A日程は3教科の私学型、B日程は5教科、C日程は英語のみといういわば一般選抜です。そのため、はじめから非常に多様な学生が、国立型も私立型も、それから英語だけはものすごくできるという学生も入ってきました。C日程は今年は21倍でした。うちは Semester制をとっていますから、8月卒業9月入学があります。9月1日の入学式には留学生も大勢いて、七百数十名の学部生のうち、留学生百数十名がこの9月に来ます。入試に関しては、さらに特別選抜の中に高校時代に留学した生徒対象の高校生留学特別選抜というのがあります。高校留学生の中には3年生の夏から留学して翌年6月ごろ帰ってきて、8月に試験をうけ9月に入学するというパターンもあり、これは年々志望者が増えて成績も非常にいいのです。高校生留学で早くから異文化体験をし、語学の勉強もしてきたような人材が、これからさらに大学でグローバルな世界を学ぶことは非常に重要ですので、皆さんにもぜひ推奨していただきたいと思います。

●英語とリベラルアーツが学部カリキュラムの軸

うちの大学は教養教育にインターナショナルをつけて国際教養(International Liberal Arts)という教育をはじめました。実は日本の大学は、90年代初頭から教養教育を解体し教養課程が殆どの大学からなくなってしまいました。これは非常にまずいことであります。学部つまりアンダーグラデュエイトに一番必要なことは、深くそして広い知識と教養を身に付ける教養教育だと思うのですが、その教養教育がほとんど空白になってしまったのです。しかも受験生は18歳前後、まだ世の中のこともわからず、自分の進路についても本当に適性がどこにあるかもわからないまま、学部学科という小さな部屋に閉じ込められてしまうわけです。

このことは教育の本質を非常にゆがめています。大学にとって一番重要なのはやはり学問をする、勉強をすることです。したがって我々のカリキュラムはそういう風になり変えてあります。人文科学、社会科学に加えて、音楽、美術史など第一人者による本格的な芸術科目の授業を少人数でやっています。ハーバード大学ではアーツ・アンド・サイエンス(Arts and Sciences)と言っているように、うちは人文系の教養大学ですけれども自然科学の科目もあります。カリキュラムには生物、生物実験、化学、化学実験、物理学、物理実験、教養数学、代数学、微積分学、統計学などを取り入れています。

入学早々の英語教育ではEAPという英語集中プログラムがあります。ここでは徹底的に英語を教育し、従来の日本の英語教育と根本的に違った仕組みで運営しています。だいたい日本の英語の先生の90%前後は文法主義者で、教科書を作る人をはじめ、学校の先生も仮定法がどうかとかSVCとかSVOとかそれからスペルが違うんじゃないとか、そういうことをやるから英語を何年学んでも外国人とコミュニケーションするツールとして使えるようにならないのです。発信できない、聞いてもわからない。そこに英語教育の根本的な誤りがあるのです。このままでは、日本の若者はいつも英語ができなくて世界から置いてきぼりにされてしまいます。

新生は秋田の田舎から出てきて初めて外国人に会うなんていう人もいる一方で、1年間アメリカに高校留学したというような人もいますから、入った当初はかなり能力に差があります。我々は入学式の直前にTOEFLの試験を行い、技能別の能力をかなり細かくみて、その上でクラス分けをします。合格者の平均TOEFL(PBT)スコアは開学当初は450点、現在は510点になっています。そして留学するための最低条件が550点ですから、それをクリアしないと留学できないし、留学できないともちろん卒業できない。第1期生は全員がそれをクリアして、第2期生は一人遅れたのですけれどもこれもクリアしました。今3期生が若干残っており、それらの学生についてはかなり面倒をみています。

● 世界のトップレベルの学部教育に全員1年間留学

つい最近、ハルビン工業大学と交流協定を結ぶ約束をしてきましたけれども、驚いたことにこの大学は中国のMITを目指しているのです。それからもっとびっくりしたことはアフリカの留学生がたくさんいるんですね。しかも私でさえあまり名前を知らないようなアフリカの国からです。これは今の中国がアフリカ外交、特に資源外交に非常に力を入れているからなのです。日本は本当にこんなことをやっていると高等教育でも中国に遅れてしまいます。そのほか韓国の東大ともいうソウル国立大学や梨花女子大学とも交流協定を締結しておりますが、これらの大学の外国語教育はセカンドフォーリンランゲージ、3言語主義、もっと具体的に言うと複言語主義を提唱しております。

今、110校の海外大学と提携しております。この提携の中で一番重要な点は授業料の相互免除です。授業料相互免除の交渉は実にタフに行います。うちは日本の公立大学ですので、53万5800円と非常に授業料は安いのですが、アメリカの場合、1年間で200万円とか300万円で、それを53万円少々本学に納めただけで正規の留学生として向こうで単位をとらせるわけです。こんな安い授業料で一人埋めるということは先方にとって損失ですので、こちらから一人送るけれども向こうからは3人受け入れるという話になる場合も多いですね。アジアでもシンガポール国立大学や香港大学は世界ランキングで東大より上ですが、そこにもうちの学生を送ります。その代わりに向こうからも来る。常にキャンパスに1学年の定員相当の留学生がいます。

留学生にとって我々のカリキュラムがよい点は、全部インターナショナルコードがついていることです。インターナショナルコードがついていると100番台は入門的な授業であるとか、400番台は高度に応用的な授業であるとかわかりますから、留学で日本に来る前に、日本に来てからの時間割が組めるのです。我々が外国に行く場合でも、学生を送るときも先方に行ったらどういう授業がとれるか、向こうの授業はうちの授業とどういう形で単位を交換できるかがわかります。1年分の単位ですから、124単位の卒業単位のうち30単位は世界のトップクラスの大学でとってくるわけです。このような1年間留学は学生にとってもかなりの試練になり

ます。学生寮に入り、しかも外国人と相部屋のところに入ると、文化摩擦とか異文化交流を身を持って体験します。このような留学制度によって、また学生がひとまわりもふたまわりも大きくなり、その結果が就職につながってるんですね。就職はあくまでも結果です。AIUは評判がいいために就職がいいというのは本末転倒で、大学はやっぱり勉強してもらうところです。その結果を企業が見てくれるわけです。就職状況は、去年は100%、今年もすでに75%の内定率ですけども、さらに色々な企業が秋田まで人を採りにきています。これからはまさに知識基盤社会で専門教育は大学院が担いますが、大学院も結構トップクラスの大学院に進学しています。

国際社会では大学院教育で専門性を身につけるので、なんだPhD持っていないじゃないか、MAもないじゃないかと言われてしまうのが一番問題です。日本で今まで通用してきたスタンダードがグローバル・スタンダードの時代に通用しなくなっているのです。フェリド・ザカリアという「アメリカ後の世界」という本を書いたジャーナリストがいますが、彼が日本に来たときの講演で、なぜ日本は国連の安全保障常任理事会に入れなかったのかを説明しました。中国の外交官と日本の外交官を比較して、中国の外交官の方がはるかに優れていると言うのです。日本の外交官の問題点は非常にビューロクラティックである、それから組織のヒエラルキーで上司のことばかり気にしている、舞台がニューヨークでも霞ヶ関の方ばかり見ている、そして最後の極め付けが「They do not speak English.」だそうです。こんなことやっていたら中国の外交官の遅しさに太刀打ちできないのは当然です。こういうことでいいだろうか。ひとりでも多くの国際的人材を育てなければいけないという危機感と使命感が、私をしてこの大学を作らせたといえるのかもしれない。

幸い、英語でリベラルアーツ教育を行う大学は日本にもいくつか出てきておりまして、このたびそういう革新的でグローバル化に対応しようとしている4つの大学が提携することになりました。我々の大学の先輩であるICU(国際基督教大学)、立命館アジア太平洋大学(APU)、早稲田大学国際教養学部、それとAIUが4月16日に東京で協定を結

びました。おそらくこの4つの大学は今後の日本、グローバル化時代の日本を担っていく、モデルの大学になるだろうと思いますので、旧来のブランドとか知名度だけではなくて大学の中味、つまりカリキュラムをよく見て学生を推薦していただきたいと思います。

● 厳格な卒業要件による質保証

卒業要件の厳格化は日本の大学が本当にすすめなければならぬことです。英語教育を例にとると10年間中学、高校、大学で勉強してきて、その英語をほとんど使えないまま社会に送り出している。TOEFL (PBT)で600点～650点以上とらないと仕事としては英語を使えないのですが、毎年日本の大卒者のなかでこれをクリアするのは1000人くらいしかいないのです。こんなことやっていいのだろうかと思います。最近ようやく卒業生をトコロテンのように押し出すだけじゃなくて、学生を商品にたとえると悪

いんですけども、品質の良い商品として社会に送り出すべきだという風潮が出始めていますね。したがって我々の大学の卒業率50%をむしろマスメディアでは評価して報道します。日本はOECD諸国の中で4年間で卒業する率が一番高く90%以上、アメリカの場合は51%、ハーバード大学などは半分か半分以下でそれが普通だと思います。だから国際教養大学はその点でもグローバル・スタンダードに近づいているとっていいかもしれません。

このまま行くと日本自体が沈み込んでしまう、という危機感を私は抱いています。今日の私のお話が少しでも皆様のお役にたてば幸いです。特にこれからは、高校あるいは中学のころから異文化教育をぜひしっかりやっていって大学に進んでほしいということで、どうかよろしく願います。どうもありがとうございました。

第二部：パネルディスカッション 10代のグローバル・マインドを育てる学校とは？
立命館宇治中学校・高等学校 校長 汐崎 澄夫 / 渋谷教育学園渋谷中学・高等学校 副校長 高際伊都子
コーディネーター：ISA国際教育研究所 所長 安藤 益代

汐崎 澄夫

立命館宇治中学校・高等学校 校長

【プロフィール】

- 1998年 立命館宇治高等学校副校長
- 2004年 学校法人立命館 中等教育担当常務理事
- 2005年 立命館中学校・高等学校校長
- 2008年 学校法人立命館 一貫教育部 教育研究・研修センター 研修部門長
- 2009年 立命館宇治中学校・高等学校 校長



高際 伊都子

渋谷教育学園渋谷中学・高等学校 副校長

【プロフィール】

- 1989年 慶應義塾大学理工学部 卒業
- 1989年 東洋英和女学院中等部・高等部 勤務
- 1996年 渋谷教育学園渋谷中学・高等学校 副校長



の場を世界から掴んでいこうとする逞しい志」です。10代でグローバル・マインドを持った子どもたちを育てるために、先進的な取り組みをなさっている立命館宇治中学校・高等学校の汐崎澄夫校長先生、渋谷教育学園渋谷中学・高等学校の高際伊都子副校長先生にお話を伺います。

● 学校ではどのような国際教育の取り組みをなさっていますか？

(汐崎先生)

日本の中ではグローバルな人材を育成するという観点からの教育は限られていて、まさに中高の現場がどうあるかが問われていると思います。私どもの学校は1995年に立命館の二番目の中高としてスタートし、立命館大学とともに国際化を進め、受験教育の抱える問題を乗り越えるべく高大七年一貫教育を押し進めてきました。2000年に立命館アジア太平洋大学の開学にあわせて英語のイマージョン

私どもアイエスエイが考えるグローバル・マインドとは「自分と社会とのかかわりをグローバルに捉え最良の自己実現